第2講

資料読解問題の対処法② 読解問題

チャプター1 読解問題とは何か
チャプター2 読解問題の基本①部分説明問題
チャプター3 読解問題の基本②理由説明問題
チャプター4 読解問題の基本③字数調整

問題を見てみよう

筆者は国連のSDGインデックスの取り扱い方についてどうすべきだと指摘しているのか、またその論拠は何か、400字以内でまとめてください。
その際、原稿用紙の一マス目から書き始め、段落を分けないでください。

国連が目指す持続可能な開発の指標で、各国の達成度の評価が実情と違い過ぎる。地球上の誰もがスウェーデン並みの消費をすれば、生態系や環境への負荷は現在の3倍になる

地球と人の未来を守るため、2030年までに達成すべき17の目標を掲げた持続可能な開発目標（SDGs）が国連で採択されてから5年。その実現に向けた「行動の10年」が始まっている。動植物を含めた「生き物の世界」と人間主導のグローバル経済の共存共栄に向けた具体的努力が問われるのだが、そもそも各国は今、どんな位置に着けているのか。

それを知る指標として、よく用いられるのがSDGインデックスだ。米コロンビア大学の経済学者ジェフリー・サックスが考案したもので、SDGsの達成度を国ごとに評価する標準的なツールとして重宝されている。そのランキングを見ると、上位に並ぶのはスウェーデンやデンマーク、フィンランド、フランス、ドイツなどの豊かな欧州諸国。だが、本当にこれらの国はSDGs優等生なのだろうか。

実を言うと、このインデックスは開発の持続可能性を測るものではない。このインデックスで上位に入っている国々の一部は、地球環境への負荷という点から見れば、むしろ最も持続不可能な状況にある。

いい例がスウェーデンだ。SDGインデックスでスウェーデンの評価は84.7点と第1位。しかし世界中の生態学者が以前から指摘しているように、この国の1年間のマテリアルフットプリント（消費する天然資源の総量）はアメリカと同程度で、国民1人当たり約32トンに上る。これは世界でもかなり悪い水準だ。世界平均は現状で1人当たり約12トン。ちなみに持続可能なレベルは1人当たり約7トンとされる。

生徒メモ欄

教員記入欄

スウェーデンの現状は持続可能なレベルを5倍近く超えており、もしも地球上の誰もがスウェーデン並みの消費をするようになれば、世界中の資源消費量は年間ざっと2300億トンになる。これは現時点で全人類が消費している資源（言い換えれば地球の生態系や環境に与えている負荷）のおよそ3倍に相当する。

実態は開発優先、環境軽視

SDGインデックスで3位のフィンランドはどうだろう。フィンランドの二酸化炭素排出量は国民1人当たり年間約13トンで、石油大国サウジアラビア並みの水準だ。ちなみに中国の国民1人当たり二酸化炭素排出量は約7トンで、インドは2トンに満たない。世界中がフィンランド並みに化石燃料を消費したら、温暖化で地球は人が住めなくなる。

SDGs達成度ランキング

順位	国	スコア
1	スウェーデン	84.72
2	デンマーク	84.56
3	フィンランド	83.77
4	フランス	81.13
5	ドイツ	80.77
6	ノルウェー	80.76
7	オーストリア	80.70
8	チェコ	80.58
9	オランダ	80.37
10	エストニア	80.06

資料：Sustainable Development Report 2020

生徒メモ欄

教員記入欄

極端な例ばかりを挙げているのではない。英リーズ大学の科学者が発表したデータによると、SDGインデックスの上位の国々は資源消費量や温暖化ガスの排出量だけでなく、土地利用や窒素などの化学物質の環境への排出量といった点でも、人口比で各国に許容される範囲を大幅に超過している。

全ての国がSDGインデックス上位国のレベルで消費し、環境汚染を続けていくとすれば、地球の生態系は間違いなく、物理的に破壊されてしまう。

つまりSDGインデックスは、エコロジーの観点から見ればつじつまが合わない。それは事実と異なる錯覚を引き起こし、豊かな国は高いレベルの持続可能性を維持しているという間違った印象を与える。

どうしてそうなるのだろうか。SDGインデックスは国連の定めた17の「持続可能な開発目標」によって作られており、それぞれの目標には多くのターゲットが含まれている。点数の算出に当たっては最初にターゲットごとにデータを集めて達成度を評価し、それらの平均を求めて目標ごとの点数を出す（ただし国によっては必要なデータがそろわない場合もある）。そして、目標ごとの点数の平均値が国の点数となる。このプロセスは合理的に見えるが、実はそこに分析上の重大な問題が潜んでいる。

まずは評価項目の比重の問題だ。どの目標も3つの観点から評価されるが、観点ごとに評価項目の数が異なる。具体的にはエコロジカルな負荷（森林破壊や生物多様性の喪失など）、社会的な開発度（教育の充実や飢餓の解消など）、そしてインフラの開発度（交通機関や送電網の整備など）という3つの観点があり、ほとんどの目標はこの3つの組み合わせで評価される。だが現実には、必ずと言っていいほど開発関連の評価項目数がエコロジカルな負荷の評価項目数を上回っている。

例えば目標11（住み続けられるまちづくりを）には4つの評価項目があるが、3つは開発関連で、生態系への影響に関する項目は1つだけだ。つまり開発関連で高い評価を得れば、生態系への負荷が大きくても（つまり持続可能性が低くても）結果として点数は高くなる。

しかも17ある目標のうち、生態系の持続可能性を主眼とするものは4つ（目標12〜15）だけで、あとの13目標は開発に重点を置いている。つまりここでも、たとえ持続可能性の点数が低くても開発関連で点数を稼げば総合点は上がる。だから生態系への負荷という点では劣等生のスウェーデンやドイツ、フィンランドのような国が、SDGインデックスでは上位に来てしまう。

さらに、エコロジカルな負荷に関する評価の大半が国内だけを対象としていて、国境を越えた貿易の影響を考慮していないという問題がある。

例えば目標11の大気汚染に関する項目を見ると、概して富裕国の点数は高い。だが先進諸国は1980年代以降、汚染源となる産業部門の工場を次々と国外に移転させており、結果として汚染も国外に追いやっている。

森林破壊や魚の乱獲についても同じことが言える。こうした問題の多くは貧困国で起きているが、その原因は裕福な国々の過剰消費にある。途上国は先進国から環境破壊を輸入し、結果としてSDGインデックスの順位を下げているわけだ。

国連はSDGsの見直しを

インフラの整備などは、もちろん国内ベースで評価すればいい。しかし国内での消費による環境負荷を正しく評価するには、国外で生じた環境負荷もきちんと計算に入れなければならない。

それをしていないから、富裕国ほどSDGインデックスの点数が高くなり、彼らが国外でもたらしているダメージは見過ごされてしまう。これではいけない。いくら開発面で高い点数を得ても、地球環境に対して及ぼした破壊的な影響をそれで相殺することは許されないはずだ。

実はSDGインデックスの作成者側もこの問題には気付いており、評価手法に関する脚注で（簡単に）触れてはいる。だが結果として算出方法が見直されることはなく、環境負荷の問題

生徒メモ欄

教員記入欄

は軽視されたままだ。
　つまるところ、持続可能な開発の判定は地球規模で行うしかない。SDGインデックスで上位にランクされる国は、生態系の破壊をもたらすことなく実現できる開発のモデルを体現していなければならない。
　残念ながら現状はそうなっていない。裕福な国々がSDGsの模範として持ち上げられているが、リーズ大学の研究が示すとおり、現実には彼らこそ問題の一部なのだ。
　国連は今こそSDGインデックスを見直すべきだ。まずはエコロジカルな負荷を消費ベースで計算し、国外での発生分も考慮に入れること。そして環境への負荷と開発の成果を別々に評価し、それぞれの実態を正しく把握することだ。
　そうすればデンマークやドイツのような国々が開発面で達成したことを正当に評価しつつ、一方で彼らが国外で生態系の破壊を加速している実態を認識できるだろう。
　見直しが終わるまで、SDGインデックスなどに頼るのはやめるべきだ。地球環境の危機は深刻だ。いま地球にはどんな負荷がかかっていて、その責任は誰にあるのか。それをもっと正確に、もっと正直に示さないと議論は始まらない。
（ジェーソン・ヒッケル『SDGs優等生の不都合な真実　「豊かな国が高い持続可能性を維持している」という嘘』ニューズウィーク日本版　2020年10月8日）

生徒メモ欄

教員記入欄

回答例を見てみよう

SDGインデックスにおいて、開発関連の評価項目数がエコロジカルな負荷の評価項目数を上回っている。また、評価の大半が国内を対象とし、国境を越えた貿易の影響を考慮していないため、国内における消費による環境負荷を正しく評価できない。よって、富裕国ほどSDGインデックスの点数が高くなり、他国へもたらすダメージが見過ごされるゆえに、豊かな国は高いレベルの持続可能性を維持しているという間違った印象を与える。しかも、SDGインデックスの作成者側はこれらの問題には気付いているが、見直しはされていない。環境負荷の問題は軽視されたままだ。したがって、持続可能な開発の判定は地球規模で行う必要があることから、国連はSDGインデックスを見直すべきだ。エコロジカルな負荷を消費ベースで計算し、国内での発生分も考慮に入れること、環境への負荷と開発の成果を別々の評価し、それぞれの実態を正しく把握することが必要だ。

(395字)

生徒メモ欄

教員記入欄